

フランス語の思考動詞の補足節における直説法と接続法の叙法選択に対して、談話の与える影響

2022/12/3@慶應大学

井上大輔（上智大学博士課程満期退学）

## 1. 本発表の目的

目的：Pourquoi crois/penses-tu que P?のPにおける直説法と接続法の叙法選択をもとに、フランス語の思考動詞の補足節における直説法と接続法の叙法選択に対して談話の与える影響の考察。

フランス語の直説法と接続法の叙法選択

→真偽判断に基づく「引き受け (prise en charge)」の観点から説明がなされている。

引き受けが正しい場合：Pourquoi crois/penses-tu que P?において、(2)のように文主語tuが補足節の内容を引き受けている場合は、補足節においては直説法のみが用いられるべき。(3)のようにpが前提となっており、引き受けが行われていない場合は、補足節においては接続法が用いられると考えられる。

- (1) Pourquoi crois/penses-tu que P?→(2)と(3)の両方の解釈が可能
- (2) Pourquoi as-tu cette opinion? (どうして君はそんな意見を持つのか?)
- (3) Selon toi, pourquoi P? (君によれば、どうしてPなのか?)

Frantext<sup>1</sup>とESLO<sup>2</sup>の検索結果：(3)のようにSelon toi, pourquoi P?の意味を持つにも関わらず、直説法が用いられている例が多数見つかった。

これらの用例は、Pの内容を対話者が意識していないと話者が判断したために、前提であるため本来は接続法が用いられるはずの補足節において、Pを新情報として提示するために直説法が用いられたと井上(2021)では判断。

問題点：本来は真偽判断と関連しているはずの直説法と接続法が、どのようにして情報構造と関連を持つのかに関しては、明確に説明されていない。

---

<sup>1</sup> フランス国立科学研究センター (CNRS) が作成する、フランス語文献のデータベース。収録されているデータは中世から21世紀までのもの。

<sup>2</sup> ESLOの正式名称はEnquête Sociolinguistique à Orléansであり、オルレアン大学により構築されたコーパス。

本稿の意図：it-cleft文における前提の特性を扱ったDelin（1992）の分析を当てはめることで、Pourquoi crois/penses-tu que P?における情報判断が、主張と前提の持つ談話的な性質から来ていることを明らかにする。

## 2. 引き受けに基づく Pourquoi crois/penses-tu que P?の補足節における直説法と接続法の叙法選択とその問題点

### 2. 1 引き受けに基づく思考動詞の補足節における直説法と接続法の叙法選択に関する先行研究

フランス語の直説法と接続法の叙法選択に関しては、Huot（1986）やSoutet（2000）において、引き受け（prise en charge）の観点から説明がなされている。フランス言語学において引き受けは複数の意味<sup>3</sup>を持つが、本稿で取り上げる引き受けは下記のCulioli（1999）の真偽判断に基づく定義に近い<sup>4</sup>。

Au sens technique de *prendre en charge*: dire ce qu'on croit (être vrai). Toute assertion (affirmative ou négative) est une prise en charge par un énonciateur.

(Culioli 1999, 131)

発話者（énonciateur）：実際の発話を生み出す物理的存在（locuteur）とは異なり、発話の内容を引き受け、発話空間を構築する役割を果たす<sup>5</sup>。

話者とは異なる発話者を仮定し、その話者が引き受けを行うと仮定する理由：「話し手＝話者」のみが主張を行うという原理では説明できない文を説明することが可能になる。

(4) Pierre s' imagine que Paul est (ind<sup>6</sup>) parti.

(Soutet 2000, 60)

<sup>3</sup> Coltier D., P. Dendale & P. De Brabanter (2009)において詳しく取り上げられている。

<sup>4</sup> Abeillé et Godard（2021）はフランス語について、またPortner（2018）はフランス語も含む複数の言語に関して、真偽判断に基づいた直説法と接続法の使い分けをおこなっている（prise en chargeという表現は使っていない）。もっとも、両者共にregretterなどの感情的叙述述語に関して、現実とは異なる状況（des situations alternatives）を示唆する観点から接続法が用いられてと述べている点において、本発表における分析とは異なる。本発表のように真偽判断と前提に基づく分析としては、スペイン語とイタリア語の接続法に対してPalmer（2001）が行ったものがある。

<sup>5</sup> Culioliにおけるénonciateurの働きにおいては青木（1989）が詳細に述べている。また、Ducrot（1984）もénonciateurやprise en chargeという表現を使っているが、énonciateurはpoint de vueを表すものであり、真偽を引き受けるものではないため、本発表における概念とは異なる。

<sup>6</sup> indicatifの略。subjunctifはsubと表記。

s'imaginer (思い込む) : croire à tort (～と間違っただけで考える) の意味であり、話者は補足節の内容を引き受けていない。したがって、文主語のPierreが補足節の内容が真であることを引き受けている。

Huot (1986) : 意見動詞の補足節における直説法と接続法の選択は、接続法が非主張、非引き受けの価値を持つと仮定することで説明可能。この場合、主張されている命題のみが真の価値を取ることができる。なお、Huot (1986) は引き受けを行う主体に関しては、明確に述べていない。

Soutet (2000) : 肯定文[p que q]<sup>7</sup>において直説法が用いられる場合を下記のように分類。

- (5) Pierre sait que Paul est (ind) parti.  
文主語も話者もqが真実であることを引き受け
- (6) Pierre ignore que Paul est (ind) est parti.  
文主語は引き受けを行わず、話者が引き受け
- (7) Pierre s' imagine que Paul est (ind) parti.  
文主語がqの内容を引き受けているが、話者は引き受けを拒否
- (8) Pierre croit que Paul est (ind) parti.  
文主語がqが真実であることを引き受け、話者は引き受けも否定もしていない。
- (9) Pierre constate que Paul est (ind) parti.  
文主語がpが真実であることを引き受け、話者はその内容を表立っては引き受けていないが、暗に認めている。

(Soutet 2000, 59-60)

引き受けを行いうる主体に関して：引き受けを行いうる対象として、Soutet (2000) は (10) のように否定文を例に出し、文主語や話者以外にも、「実際、または想像上の対話者 (interlocuteur réel ou supposé) 」が引き受けを行いうると述べている。

---

<sup>7</sup> 主節において直説法が用いられる理由について、Huot (1986) とSoutet (2000) は言及していない。Abeillé et Godard (2021) は主節において直説法が使われる理由を平叙文、感嘆文、疑問文と分類した上で、平叙文と感嘆文は話者がその命題が真であることを信じているため使われるとしている。また、疑問文に関しては、「真」と言う言葉を使っているが、質問と答えが組み合わさって、命題をもたらすと述べている。なお、Lyons (1981) は疑問文はnon-commitmentの命題態度を表すのみならず、対話者に真偽値を割り当てるよう要請する機能を持っている点において、命令や要求とは異なるとしている。

(10) Je ne crois<sup>8</sup> pas que le Christ est (ind) ressuscité des morts.

(Soutet 2000, 83)

接続法が使われる用例の分類：三つのケースが存在

(11) → 真実ではない可能性が高いため引き受けが行われない

(12) → 未来の事象を表すため、引き受けが行われていない

(13)から(15)→ 真偽判断の観点からque節が評価されていないため、引き受けが行われない

(11) Pierre doute que Paul soit (sub) parti.

qが真実であることが疑われている、または否定されている時

(12) Pierre veut que Paul soit (sub) parti.

qが真実であることが文主語から評価可能でない時

(13) Il faut que Paul soit (sub) parti.

qが真偽判断の対象ではなく、必要性を表している時

(14) Il est possible que Paul soit (sub) parti.

qが真偽判断の対象ではなく、可能性を表している時

(15) Il est bon que Paul soit (sub) parti.

qが真偽判断の対象ではなく、価値判断をしている時

(Soutet 2000, 60-61)

(13) と (15) : 補足節は前提<sup>9</sup>であり、真偽判断の対象となっていないと考えられる。従って、補足節の内容は引き受けの対象になっていないため、接続法が使われていると判断される。以上の事を踏まえて、本稿では次のように引き受けを次のように定義する。

・ 引き受けの定義

対象となる命題が真であることを主張すること

---

<sup>8</sup> このcroireは信仰を表すcroire dogmatique (Martin 1987) であり、動詞の意味に影響をされて、直説法が使われているように思われるかもしれない。しかし、Frantextからは、Je ne crois pas qu'il est (ind) cassé ce vélo, dit Mann.のように信仰を表さないcroireの否定文においても直説法が観察されている。したがって、croireの意味が叙法を一義的に決定づけるとは言えないだろう。もっとも、井上 (2022) では、ESLOから得られたデータでは、trouverとpenser/croireの間に統計的な有意差が存在することが確認されている (Frantextでは有意差は観察されていない)。そのため、主節の動詞が補足節の叙法選択に影響を与える可能性は否定できない。

<sup>9</sup> 主節を否定しても補足説の真偽に変化がない場合、補足説は前提となっていると考えられる (Allott 2010)。

引き受けを行いうる対象：(16)においては、引用符からque以下が第三者の発した文章の引用であることは明確である。したがって、話者、文主語、対話者<sup>10</sup>に加え、第三者も引き受けを行いうると仮定する。

(16) Je ne pense pas qu'ici (comme « là-bas ») « la politique, la police et le milieu ne font (ind) qu'un ».

(Claude Mauriac, *Et comme l'espérance est violente*, 1976<sup>11</sup>)

以上のような「引き受け」の定義から、直説法と接続法の叙法選択について次のように述べることができる。

- ・直説法：引き受けが行われるときに用いられる
- ・接続法：引き受けが行われないうちに用いられる。引き受けが行われないうちは、対象となる命題が偽、並びに真であると確証できない、または前提<sup>12</sup>である時
- ・引き受けを行いうる対象：話者、文主語、対話者、第三者

---

<sup>10</sup> 対話の場面が多い話し言葉コーパスにおいては、対話者、ならびに会話で言及された第三者の意見を特定するのが容易だと考えられる。そのため、補足説内で直説法が出現する確率が、文献コーパスよりも会話コーパスにおいて高くなる可能性がある。こうした理由からje ne crois/pense/trouve pas queについて、FrantextとESLOから得られたデータを比較した。するとesloの方が直説法の出現率が高く、有意差が観察された。これは、対話者、ならびに会話で言及された第三者が引き受けを行いうることを結果であると考えられる(井上 2022)。また、esloにおける直説法と接続法の出現率を確認するため、(il) faut que/qu'を調査したところ、接続法712例に対し、直説法は17例であった。加えて、直説法の用例を見たところ、je vois, je l'ai, il courtのような同音異義語が5例、vous gagnezのような発音を区別しにくいものが3例であった。従って、esloにおいて直説法の出現率がfrantextより高くなるとは考えにくい。

<sup>11</sup> Frantextから得られる書誌情報を利用した。以下同様。

<sup>12</sup> なお、savoirを否定しても補足節の内容は真であるが、直説法が用いられる。これは意味論と語用論の両方に影響を受けていると考えられる。意味論的観点において太田(1983, 118)は、感情的述語は'know+α'と記述でき、knowのような半叙述動詞より前提性が強いと言及している。また、語用論的観点からは、savoir que以下には新情報が来て補足節の内容を主張するためだと考えられる。詳しくはKorzen(2001)や井上(2021)を参照のこと。

引き受けの概念に基づく説明の有効性：井上（2020）では思考動詞croireとpenserの否定文<sup>13</sup>、井上（2021）では思考動詞croireとpenserの疑問文<sup>14</sup>において、コーパスから得られたデータに基づき直説法と接続法の出現率の統計的分析から確認したところ、有効であると結果が得られた。

↓

本発表では、引き受けの定義は思考動詞の補足節における叙法選択にも有効であると仮定して、論を進める

## 2.2 Pourquoi crois/penses-tu que P ?における叙法選択

引き受けによる説明が当てはまらない例

→Soutet（2000, 81）の取り上げているPourquoi croit-il que P ?

Frantextでは、第三人称の例がPourquoi croit-il que P ?しか観察されなかった。

同様の意味を持ち、かつFrantextにおいて多数観察されたtuおよびvousを例に取り上げる。

以下の表記はtuで統一。

Pが（17）のように直説法：主節の動詞croisとest partiの両方がpourquoiの作用域となりうる。そのため、（19）と（20）の両方の解釈が存在しうる。

Pが（18）のように接続法の場合、pourquoiの作用域となりうるのはsoit partiであり、

（20）の意味を持つ。このうち、Pourquoi crois-tu que P ?のPが直説法であるにも関わらず、Selon toi, pourquoi P ?の意味を持つのは、「引き受け」に基づく説明に矛盾していると考えられる。

---

<sup>13</sup> Martin (1988) はje ne pense/crois pas queにおいてはque以下は話者のunivers de croyanceを表すが、il ne pense/croit pas queのような三人称においては話者と文主語のunivers de croyanceを表すとしている。したがって、je ne pense/crois pas queにおいては、queの内容を対話者が明確に引き受けている場合を除いては、que以下を引き受ける存在は存在せず、接続法が用いられる。それに対して、il ne pense/croit pas queのような三人称においては、話者がque以下を引き受けている可能性がある（なおMartinは、il pense/croit queに見られるqueを偽と話者が見なす傾向は否定文になるとなるとしている）。そのため、je ne pense/crois pas queに比べて直説法の出現率が高くなると考えられる。Frantextからはこの仮説を裏付ける結果が得られた。

<sup>14</sup> Lyons (1981) の述べるように、話者が主張を行いつつ相手の意見を尋ねる手段としては否定疑問文が使われる。したがって、Crois/Penses-tu que P ?のような通常の疑問文においては、話者はque以下の内容を引き受けておらず、対話者の意見を求めるために疑問を呈示していると考えられる。そのため、que以下には直説法よりも接続法が出現する可能性が高いと考えられる。Frantextから得られた結果をこれを示すものであった。

- (17) Pourquoi crois-tu que Paul est (ind) parti ? → (19) と (20) の両方の意味になりうる  
 (どうして君は、ポールが出発したと信じているの?)
- (18) Pourquoi crois-tu que Paul soit (sub) parti ? → (20) の意味  
 (どうして君は、ポールが出発したと信じているの?)
- (19) Pourquoi as-tu cette opinion ?  
 (どうしてピエールはそんな意見を持っているの?)
- (20) Selon toi, pourquoi P ?  
 (君によれば、どうしてPなの?)

\* Pourquoi crois-tu que P ? においてPが直説法の場合

→ Pourquoi as-tu cette opinion ? という解釈が可能であるのは、引き受けて説明可能。

Pを引き受けているのは文主語のtuのみ。話者はPを引き受けておらず、tuが引き受けを行った理由を質問するために Pourquoi as-tu cette opinion ? と尋ねている。

Pourquoi crois-tu que P ? が Pourquoi as-tu cette opinion ? という意味を持つ場合、主語である Pierre が P の内容を引き受けているため、P に接続法を用いることができず、直説法しか生起しえない。

\* Pourquoi crois-tu que P ? が Selon toi, pourquoi P ? の意味を持つ場合

WH疑問文は「前提の引き金 (presupposition trigger) として機能する。従って、Pが直説法になるのは引き受けによる説明に矛盾。もし引き受けによる説明が正しければ、この場合Pは常に接続法であるべきである。

(21) Who caught John ? → Someone caught John. が前提

(22) How many years did he get ? → He got some years. が前提

Allott (2010<sup>15</sup>)

Pourquoi crois-tu que P ? が Selon toi, pourquoi P ? として解釈される = Pは前提

→ Pが接続法の場合においてのみ、Pourquoi crois-tu que P ? は Selon toi, pourquoi P ? の意味を持つべきである。実際には、Pourquoi crois-tu que P ? のPにおいて直説法が用いられているにもかかわらず、Selon toi pourquoi P ? として解釈されうる可能性が存在する。FrantextやESLOの用例においても同様の矛盾が観察された。

<sup>15</sup> 電子書籍版のためページ数はわからず。

## 2.3 Pourquoi crois/penses-tu que P ?のコーパスにおける用例とその用法分析

Frantextから得られたデータ：Pourquoi crois-tu que P ?に関しては、1900年以降の出現例を調べたところ下記のような結果が得られた<sup>16</sup>。que節が接続法現在でPourquoi as-tu cette opinion ?となる例は見受けられなかった。

Pourquoi crois-tu que P ?	ind pr	sub pr
Pourquoi as-tu cette opinion ?	3	0
Selon toi, pourquoi P ?	6	1

Pourquoi penses-tu que P ?：接続法現在であるにもかかわらず、Pourquoi as-tu cette opinion ?になると思われる例が1例見つかった。Pが直説法現在となる場合に、Pourquoi as-tu cette opinion ?とSelon toi, pourquoi P ?の両方の意味になると思われるものをそれぞれ2例発見。

Pourquoi penses-tu que P ?	ind pr	sub pr
Pourquoi as-tu cette opinion?	2	1
Selon toi, pourquoi P?	2	0
Pourquoi & Selon	2	0

ESLOから得られたデータ：croireの用例は見つからず、penserに関してはPourquoi as-tu cette opinion ?とSelon toi, pourquoi P ?の両方の意味を持つ用例が観察された。

Pourquoi penses-tu que P ?	ind pr	sub pr
Pourquoi as-tu cette opinion?	0	0
Selon toi, pourquoi P?	2	0
Pourquoi & Selon	1	0

上記の例において直説法現在と接続法現在のみを分析の対象とした理由

→時制が直説法と接続法の叙法選択に影響を与えうる可能性が存在するため。だが、時制が話者の選択に意図が時制に影響を与えうるのは直説法の時のみであり、接続法はそうした話者の意図に影響を受けない<sup>17</sup>。

<sup>16</sup> 分類に関しては、フランス語母語話者に確認済み。以下その他の例も同様。

<sup>17</sup> 詳しくは井上（2021）を参照。

調査の範囲を広げるために、接続法過去・半過去・大過去も含めてPourquoi crois/penses-tu que P?のPが接続法であるにもかかわらず、Pourquoi as-tu cette opinion?になる例が他にも存在するのかを検索。

ESLO：接続法現在以外の例が見つからなかった。

Frantext：下記のような結果が得られた<sup>18</sup>（半過去や大過去は観察されなかった）。

Pourquoi penses-tu que P ?	sub pr	sub ps
Pourquoi as-tu cette opinion?	1	0
Selon toi, pourquoi P?	0	3
pourquoi & selon	0	0

Pourquoi crois-tu que P ?	sub pr	sub ps
Pourquoi as-tu cette opinion?	0	0
Selon toi, pourquoi P?	1	4
pourquoi & selon	0	0

接続法現在と接続法過去：croireとpenser合わせて9例観察

8例：Selon toi, pourquoi P ?

1例：Pourquoi as-tu cette opinion ?

que節が接続法の場合→Selon toi, pourquoi P?の意味になる傾向が強い。

Pourquoi crois/penses-tu que P?においてPが接続法である場合において

- ・引き受けに基づく説明に反してPourquoi as-tu cette opinion?となる用例
- ・ Pourquoi crois/penses-tu que P?のPが直説法であり、かつPourquoi as-tu cette opinion?と

Selon toi, pourquoi P?の両方の解釈が可能になる用例

- ・ Pの要素に共通の意味属性が存在する可能性

→井上（2021）で取り上げられているため本発表では取り上げない。

Pourquoi crois/penses-tu que P?において、Pが直説法であり、かつその意味がSelon toi, pourquoi P?となる場合→（23）

前提となっているはずのPについて対話者が失念していると話者がみなし、対話者にPを新情報として提示するためにあえて直説法を使っている。

<sup>18</sup> sub prは接続法現在（subjonctif présent）、sub psは接続法過去（subjonctif passé）の略

(23)ALBOURY. - L'autre Blanc est en train de me chercher. Il a un fusil, lui.

Horn. – Je sais je sais je sais ; pourquoi croyez-vous que je suis là Avec moi ici, il ne fera rien.

(Bernard-Marie Koltès, *Combat de nègre et de chiens*, 1983)

(23) : 話者と対話者は同じ場所にいるのだから、Pのje suis là（私はそこにいる）は言うまでもなく二人に前提として共有されているはず。しかし、ALBOURYは「HORNがここにいる」という事実を意識しているようには思えない。

↓

本来であれば前提として共有されているため接続法で表すべきPの内容を、新情報として提示するために直説法が用いられる。

情報構造からの接続法の用法説明→守田（2015）

le fait queにおける直説法と接続法の叙法選択に情報構造が影響を与えることを指摘。

情報構造が直説法と接続法の叙法選択に影響を与えるのか、またこうした用法は Pourquoi crois/penses-tu que P?に観察される現象なのか、それとも前提全般に生じる現象なのかは井上（2021）では明らかになっていなかった。

Delin（1992）及びDelinで（1995）で取り上げられているit-cleft分裂文に関する説明をもとに考えていく。

### 3. 引き受けによる説明と談話要因

#### 3. 1 it-cleft分裂文における情報構造とremind機能に関して

Delin（1992）によるit-cleft構文の説明

(24) のJohnをClefted constituent、who leftをcleft clauseと呼ぶ。

(25) のaと、それを否定したbのどちらもcを前提としていることから、it-cleft構文は論理的前提に基づいていると考える。

(24)It was John who left.

(25)a It was my friend who was caught.

b It wasn't my friend who was caught.

c Someone was caught

(Delin 1992, 3<sup>19</sup>)

---

<sup>19</sup> 雑誌版ではなく、インターネットで入手可能なPDFを利用したため、ページ数はそちらにそろえている。Delin（1995）に関しても同様。

## it-cleft構文の分類

STRESSED-FOCUS CLEFT<sup>20</sup>→ (26)

clefted constituent (ここではBarbara) に第一アクセントが来て、cleft clauseであるI was withには弱いアクセントしか来ていない。cleft constituentが新情報であり、cleft clauseは聞き手にもなじみ深い情報が来ている。

(26)C. B: So who's Barbara?

B. S: Let me put it this way. When you saw me with anyone, *it was Barbara I was with.*

INFORMATIVE-PRESUPPOSITION CLEFT→ (27)

第一アクセントはcleft clauseに現れる。そして、cleft clauseに含まれている情報は(少なくとも部分的に)聞き手にとっての新情報であり、発話の時点においては共有された情報ではない。(27)ではFIRSTが新情報<sup>21</sup>。

(27)A: Joe Wright you mean

B: Yes yes

A: I thought it was Joe Wright who'd walked in at FIRST.

(Delin 1992, 5)

(28) →cleft clauseにアクセントがおかれ、「思い出させる (reminder)」機能

(28)B: To be frank, I've heard from a number of sources that when you were interviewed for a job here that you think that you didn't get the job because of me

A: Oh no, I never said that ... I went to great pains to tell people that you were the one supporting me. In fact it was VERY shortly AFTER that INTERVIEW that I send my circular letter AROUND to various scholars and I sent YOU a copy

(Delin 1992, 11)

聞き手が前提とされている情報を前もって知っているにもかかわらず、発話の瞬間にその情報について考えていないときに用いる (Delin1992)

(29) : (28) と同じアクセントパターン<sup>22</sup>を持つものの、it-cleft構文ではない

<sup>20</sup> Delin (1992, 4) は、Prince (1978 a) の情報構造によるit-cleft構文の分類を取り入れている。

<sup>21</sup> 以下、大文字はアクセントの位置を表す。

<sup>22</sup> Delin (1992)には (28) と (29) のアクセントに関する言及はないが、Delin (1995, 15) には同じアクセントパターンであることが明確に言及されている。

通常の主張の特徴である「最初の言及（first mention）」という印象を与える。

(29) In fact, VERY shortly AFTER that INTERVIEW I send my circular letter AROUND to various scholars and I sent YOU a copy

(28) においてアクセントがcleft clause内に生じず、clefted constituentにのみアクセントが生じるSTRESSED-FOCUS cleftとなった場合

→Delin (1992, p. 13) は (30) を前提情報が旧 (Given) 情報として与えられている例として取り上げられた上で、話者はすでに存在した情報について言及している (refer) としている。

(30) A: John's finished all the coffee.

B: Well, why don't you make some more?

A: Because it's him who finished it, and I don't see why I should make it all the time.

上記の内容を整理すると次のようになる。

構文タイプ	論理的前提	情報タイプ	役割
STRESSED-FOCUSED CLEFT→ (30)	○	旧情報	refer
INFORMED-PRESUPPOSED CLEFT→ (28)	○	新情報	remind
通常の構文→ (29)	×	新情報	inform

- ・ 論理的前提を生じされる要因→it-cleft構文
- ・ 新情報を生じさせる要因→cleft clause内におけるアクセントの存在
- ・ 情報タイプの分類がさすのは、it-cleft構文に関してはcleft clause内の情報の新旧、通常の構文に関しては文全体の新旧

論理的前提と情報構造を独立したものと捉え、その上で論理的前提は文構造から、新情報と旧情報の区別はアクセントから生じると考えることの利点。

→it-cleft構文の持つ「思い出させる」機能をよりよく説明できる。

it-cleft構文：必然的に論理的前提を伴うため、cleft clauseの内容はすでに扱われた情報として提示されることになる。一方、cleft clauseにアクセントを置くことで、すでに扱われたはずの前提でありながら、その場で改めて情報を提示しているという含みを持たせることが可能になる。

前提の持つ「すでに触れた内容である」というニュアンス→anaphoricity (Delin 1992)

前提は談話において前件 (antecedent) を必要とする。そして、発話の場において前提が正しく解釈されるためには、前件が構築される必要がある。そのため、前提を含む文章を用いることによって、話者は対話者に対して、「この内容はすでに言及された内容であり、前件を探すべきである」というメッセージを与えることができる。

### 3. 2 Pourquoi crois-tu que P?における情報構造とremind機能

(31) →Selon toi, pourquoi P ?

(31)ALBOURY. - L'autre Blanc est en train de me chercher. Il a un fusil, lui.

Horn. - Je sais je sais je sais ; Pourquoi croyez-vous que je suis (ind) là ? Avec moi ici, il ne fera rien.

Pは論理的前提であり、「すでに会話で扱われた内容である」という色彩を帯びるようになる。しかし、対話者であるALBOURYはPの内容を意識していないように思われる。

↓  
直説法を使うことで、話者はPを「すでに話題にはなっているものの、この場で改めて話題にした」という形で提示。結果としてit-cleftにおけるreminde構文と同様の機能を持つ<sup>23</sup>。

(32) : 「こちらの席を予約しましょうか」という受け答えからは、対話者はPにあたる「私がここまで移動する」ということを意識しているようには思えない。そのため、話者はPを思い出す必要があると判断し、remind機能を持つPourquoi crois-tu que P+直説法を使ったと考えられる。

(32)Je vous la réserve cette place, ou non ?

- Naturellement<sup>24</sup>. Pourquoi croyez-vous que je me suis (ind) déplacé jusqu'ici ? Pour le charme de votre conversation ?

(Jean-Luc Benoziglio, *Cabinet portrait*, 1980)

---

<sup>23</sup> 英語ではアクセントを使って情報の新旧を表しているのに対して、フランス語では直説法と接続法の叙法選択を使って情報の新旧を表している

<sup>24</sup> TintinシリーズのObjectif Lune (Hergé 2003) にも以下のような、naturellementを使った用例が見られた：A votre santé ! (...) Messieurs les passagers pour la Lune, en voiture ! (...) Car vous prendrez bien des passagers, j'espère ? - Mais naturellement ! Pourquoi croyez-vous que je vous ai demandé de venir me rejoindre ?。この例で見られるnaturellementのようなque以下が前提となっていることを示す表現と、que以下の叙法選択の関連性を調べることで、remind機能の働きについてより明確にすることができる可能性がある。

(33) : Pの内容を対話者が意識しているかどうかを判断するのは、話者次第であるとする  
ことで説明可能。

rappeler (思い出させる) という言葉を使っていること、話者がその後に答えている内容が  
対話者にとっては明確であることから、直説法を使ってもおかしくないと思われる。しか  
し、話者はこの状況においては、Pを意識していないはずはないと判断し、接続法を使っ  
たと考えられる (構文としてはrefer型) 。

(33)- Et vous les laissez tranquillement assassiner ?

- *Pourquoi croyez-vous que je sois (sub) là ? Il faut vous rappeler ceci : nous ne sommes pas  
chargés de l'application de la loi. Notre boulot est de savoir ce qui se passe, un point c'est tout*  
(Harry Mathews, *Ma vie dans la CIA : une chronique de l'année 1973*, 2005)

(34) : refer型。Aは最初にJohn's finished all the coffee.と述べているのであるから、Bの反  
応を見て、Aを意識していないと考えて新情報としてアクセントを置くことも可能だと思  
われる。しかし、ここではAはそのような判断をせず、アクセントを置かずにrefer型の構  
文として提示したということになる。

(34)A: John's finished all the coffee.

B: Well, why don't you make some more?

A: Because it's him who finished it, and I don't see why I should make it all the time.

談話の構築方法が叙法選択に影響を与える場合：話者がどのように情報を提示するかが判  
断基準となるため、外部からは話法の選択基準が理解できない。(31)と(33)のよう  
に、矛盾した用法が見られるのは、このような理由によると考えられる。

it-cleft構文と比較することにより、Pourquoi crois/penses-tu que P?がSelon toi, Pourquoi P?と  
なる場合の論理的前提と叙法の役割を図にまとめると下記のようなになる。

	論理的前提を伝える要因	情報構造を伝える要因
it-cleft構文	構文	アクセント
Pourquoi crois-tu que P?	構文	叙法

\* Pourquoi crois-tu que PはSelon toi, pourquoi P?を意味する

Pourquoi crois/penses-tu que P ?がSelon toi, Pourquoi P ?となる場合の叙法と役割は次のようになる。

	叙法	情報	役割
Pourquoi crois/penses-tu que P?	直説法	新情報	remind
Pourquoi crois/penses-tu que P?	接続法	旧情報	refer

\* Pourquoi crois-tu que PはSelon toi, pourquoi P ?を意味する

### 3.3. 接続法の談話的要因とポライトネス

Delin (1992) : Prince (1978 b) に基づき、対話者は言われた内容を話者<sup>25</sup>にデフォルトで割りあてる (attribute) としている。(35) では、Bのthe neighboursはAの発言の引用に過ぎず、この部分はAに割り当てられると考えられる。

(35)a There are some neighbours.

b A: Did the neighbours break the window?

B: No, it wasn't the fault of the neighbours – we haven't got any neighbours.

割り当て→前提を用いることで無効可能。

前提を含む文章は前件を持つ。そのため前提が談話に現れると、対話者はその内容は初めて言及されるのではなく、すでに言及されたものだと判断し、その前件を探すよう要請されることになる。

前提を用いる→話者はその命題に「この発話をしたのは自分ではない」という印象を与えることが可能になり、命題そのものは誰にも割り当てられないままとなる。こうした現象は引き受けと類似しており、そのため引き受けが持つポライトネス (Brown & Levinson, 1987) を考える上で役立つと言えるだろう。

(36) : 倒置による否定疑問文は、倒置疑問文と同じく主張の働きを持つ<sup>26</sup>。したがって、(36) は本来直説法が来るはずである。しかし、接続法が用いられている→ポライトネスの影響 (Inoue 2018) 。

(36) Une dernière question, Don Avelino : ne croyez-vous pas que le nain ait (sub) déjà payé trop cher et qu'il mérite, si ce mot signifie quelque chose, le pardon ?  
- La police, Don Pedro, murmura Don Avelino au bout d'un silence, n'entend pas le pardon, elle ne connaît que le code.

<sup>25</sup> この話者は必ずしも現行の話者とは限らない

<sup>26</sup> Borillo (1979)

Ne croyez-vous pas que ? : 相手からの同意を引き出すために使われている<sup>27</sup>と考えられる。直説法を用いると、Huot (1986) が述べているように、「対話者の意見を推測している (avoir l'air de présumer de celle (= l'opinion) de son interlocuteur<sup>28</sup>) 」と思われてしまう可能性がある。

接続法を用いることで、補足節の内容を誰がその主張を行ったかはわからない前提として提示している。その結果相手に対するポライトネスを維持。

(37) : 対話者が使った *sémi-débile* という表現を踏まえて話者は *débile* を用いているのだから、補足節の内容を対話者が引き受けているのは明白<sup>29</sup>であり、直説法が用いられているべきだと考えられる。

(37)-Une brute, un taulard et un semi-débile, compléta Hélène. Père en était enchanté.  
- Je ne crois pas qu'il soit (sub) débile, nuança Pierre.

(Fred Vargas, *Un lieu incertain*, 2008)

接続法が用いられる理由：直説法を用いることによって、相手の意見を否定することが明確になり、相手のフェイスを傷つけてしまう可能性がある。

接続法を用いて、補足節の内容を前提として提示することで、*que*以下を誰が引き受けているかを曖昧にすることで、相手の意見を否定しているわけではないと伝えている<sup>30</sup>。

#### 4. 結論

Pourquoi crois/penses-tu que P ? の持つ、「思い出させる」機能

---

<sup>27</sup> フランス語母語話者に確認済み。(37) も同様。

<sup>28</sup> カッコ内筆者

<sup>29</sup> 井上 (2022) にあるように、思考動詞の否定文における直説法と接続法の叙法選択において、対話の場面においては直説法が用いられる割合は有意に高くなっている。

<sup>30</sup> Pierreの動作を描写するために、*nuança* という動詞が使われていることも、こうした解釈を裏付けているといえるだろう。Larousse (2016)によれば *nuancer* は *exprimer sa pensée en faisant sentir les différences les plus subtiles* という意味であり、ここでは話者は対話者の *une brute, un taulard* には同意しつつも、*un semi-débile* には同意していないことを伝えるために用いられている。動詞 *nuancer* のもつこのような意味も、明確な形で反論を伝えないために用いられている接続法の性質と一致していると考えられる。

→Pourquoi crois/penses-tu que P ?が構文的には論理的前提を表しながらも、que内で直説法を用いることでPの内容を新情報として提示することから生じている。

直説法と接続法の叙法選択：真偽判断に加え談話構築も影響を与えている可能性が高い。

談話構築能力：接続法のもつポライトネス機能にも影響を与えている可能性がある。

直説法と接続法の叙法選択：真偽判断に加えて、談話の影響も大きく、そのため脱文脈された状況では想定されにくい用法が観察される。

直説法と接続法の叙法選択においてより適切な説明を構築するためには、本発表で述べたような談話要因を考慮したうえで、実際の用例に当たっていくことが必要。

#### [参考文献]

- Abeillé, Anne. & Danièle Godard. 2021. *La Grand Grammaire du Français 1*. Paris: Imprimerie Nationale.
- Allott, Nicholas. 2010. *Key Terms in Pragmatics*. London: The Continuum International Publishing Group.
- Brown, Penelope. & Stephen Levinson. 1987. *Politeness. Some universals in language use*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Girac-Marinier, Carine. & Julie Pelpel-Moulian. 2016. *Dictionnaire de français version 3*. 3. Paris: Larousse.
- Culioli, Antoine. 1999. *Pour une linguistique de l'énonciation. Formalisation et repérage, t. 2*. Paris: Ophrys.
- Coltier Danielle., Patrick. Dendale & Philippe, De Brabanter (2009), "La notion de prise en charge : mise en perspective." *Langue française* 162; 3-27.
- Delin, Judy. 1992 "Properties of It-Cleft Presupposition." *Journal of Semantics* 9; 289-306.
- Delin, Judy. 1995 "Presupposition and Shared Knowledge in It-Clefts." *Language, Cognition and Neuroscience* 10 (2); 97-120.
- Ducrot, Oswald. 1984. *Le dire et le dit*. Paris: Minuit.
- Inoue, Daisuke. 2018. "la notion de la prise en charge et le choix du mode dans la complétive des interronégatives inversée." *Etudes de langue et littérature françaises* 113, 185-200.
- Larousse. 2016. *Dictionnaire de français version 3*. 3.
- Lyons, John. 1981. *Language, Meaning & context*. London: Fontana.
- Martin, Robert. 1987. *Langage et croyance: les "univers de croyance" dans la théorie sémantique*. Pierre Mardaga: Bruxelles.
- Martin, Robert. 1988. "Croire que / penser que" *Annexes des Cahiers de linguistique hispanique médiévale* 7, 547-554.
- Palmer, Frank. Robert. 2001 *Mood and Modality*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.
- Portner, Paul. 2018. *Mood*. Oxford: Oxford University Press.
- Prince, Ellen. 1978 a. "A comparison of WH-clefts and it-clefts in discourse." *Language* 54; 883-906

- Prince, Ellen. 1978 b. "On the function of existential presupposition in discourse." *Papers from the Fourteenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*. Eds. by D. Farkas, et al. University of Chicago, 362-376.
- Huot, H el ene. 1986. "Le subjonctif dans les compl etives : subjectivit e et modalisation." In *La grammaire modulaire*. Eds by Mitsou Ronat & Daniel Couquaux. Paris: Minuit, 81-111.
- Korzen, Hanne. 2001. "Factivit e, semi-factivit e et assertion: Le cas des verbes *savoir, ignorer, oublier* et *cacher*." In *Langage et r eference: m elanges offerts   Kerstin Jonasson   l'occasion de ses soixante ans*. Hans Kronning (ed). Uppsala: Acta Universitatis Upsaliensis, 323-333.
- Soutet, Olivier. 2000. *Le subjonctif en fran ais*. Paris: Ophrys.
- 青木三郎. 1989 「人称に関する日・仏語対象言語学的研究：『文藝言語研究. 言語編』, 16: 1-44.
- 井上大輔. 2020. 「フランス語思考動詞*croire*と*penser*の否定文における叙法選択と「引き受け」の役割」『SOPHIA LINGUISTICA』, 69: 37-54.
- 井上大輔. 2021. 「Pourquoi crois/penses-tu que P ?の従属節における直説法と接続法の叙法選択と、引き受けの有効性の再検討、およびそれ以外の要因が与える影響」『SOPHIA LINGUISTICA』, 70: 55-73.
- 井上大輔. 2022. 「思考動詞の補足節における叙法選択において、引き受けの果たす役割—フランス語コーパスFrantextとesloの比較に基づいて」日本フランス語フランス文学会2022年春季大会発表
- 太田朗. 1983. 『否定の意味』（再版）東京：大修館書店.
- 守田貴弘. 2015. 「接続法の多元的拡張 Le fait queの分布と法の選択」川口順二編『フランス語学の最前線3』東京：ひつじ書房, 107-139.